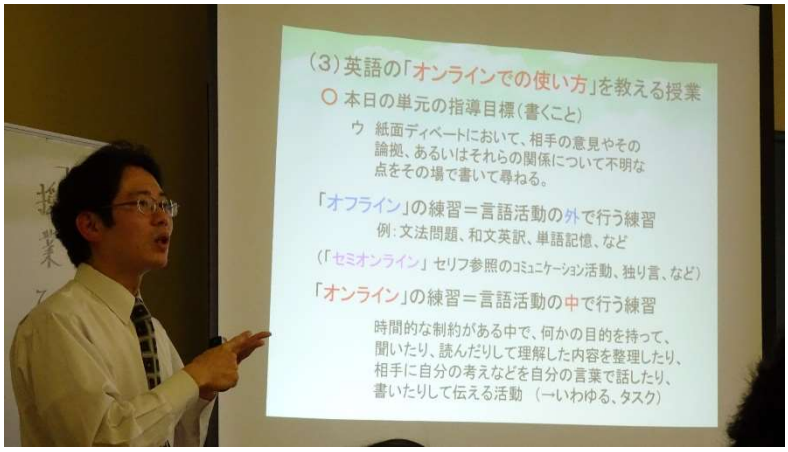
教育課程実践モデル事業　EAST 通信　第５号（H29.10.30）　松江東高等学校

１０月２０日（金）、本事業の第１回運営指導委員会の開催にあわせ、竹田育子教諭による英語の研究授業及び授業研究、さらに校内研修会を開催しました。

英語はディベートの授業でした。写真は、ペアになって生徒が立ち、英語で討論している様子です。高校現場からだけでなく、教育指導課や教育センターさらに島根大学や島根県立大学からの参加もあり、校内の先生方と合わせて５０人近くの先生方の参観があったことで授業会場の視聴覚教室はいっぱいになりましたが、生徒は臆することなく、自分の意見を竹田教諭が示す構成の型にあてはめながら述べていました。

なお、教育課程実践モデル事業における英語の授業実践では、ディベートを通して批判的思考力を養うことを目標としていますが、そのために次の３つのことを意識して単元計画、授業構成を組みたてています。

① 証拠に基づく論理的な思考力　（多面的で客観的な視点からの思考）
② 内省的思考　（他者の非難よりも、自分の思考を意識的に吟味する思考。いわゆる「メタ認知」）
③ 解決や判断を支える汎用的なスキル　（問い、情報収集、推論、行動決定など）



その後の授業研究では、運営指導委員である島根大学の猫田准教授による講評に、参加者が納得させられることばかりでした。なかでも、オンラインとオフラインの話は特に参考になったと思います。（写真のスライド参照）

校内研修の最後には、運営指導委員長である関西大学の森教授による講話がありました。

カリキュラム・マネジメントの観点から、この事業で育てたい生徒像と学校の教育目標とがリンクしていることが大事との話に始まり、その目標を先生と生徒で共有することが肝要であるとされ、その上で次のような話がありました。

カリキュラム・マネジメントとは、教育目標を達成するためのカリキュラムを考え、それを動かしていくことである。その過程でのＰＤＣＡサイクルを確立させ、さらに人的・物的資源を、学外の力や資源も活用しながら効果的に組み合わせいくという側面がある。それをマクロの視点でとらえれば学校経営であり、ミドルの視点であれば教科縦断的に、学年横断的にそれぞれを相互に連携・関連させカリキュラムを動かしていくことであり、ミクロの視点でとらえれば授業となる。カリキュラム・マネジメントをする上で、先生方の議論が常にエビデンスを基盤とすることが大事である。

エビデンスについては、運営指導委員である島根大学の御園准教授も、運営指導委員会で次のように指摘されました。

数学でも批判的思考力を養おうとされているが、そうすべきだと教員がなぜ感じたのか、エビデンスをもとにその目標を立て、手立てを考えていくことが大事である。なぜ思考パターンがわかっていないのか、論理的思考がつながらないのかなど、その原因をはっきりさせていくことが第一歩でないといけない。

森教授の講話ではさらに次のような話もありました。

見える学力以上に水面下の学力、つまり見えにくい学力、見えない学力がこれからは重要視されていく。わかったことを使うと習得したことがゆらぎ、わかりなおす。この繰り返しが、深い学びにつながっていく。

運営指導員委員会で、「変わろうとしている学校とそうでない学校との格差が広がってきている」との話にも関わり、教育課程実践モデル事業を学校全体でさらに推進していくことが重要だと再認識した１日でした。

〇授業参観の感想　＊抜粋　（表現は一部変えています。）

・意欲的積極的に活動される生徒と先生の熱意が一つになっていた。オンラインのスピード感に驚いた。
・教科書を読む角度（視点）を柔軟にして、構成することの大切さを学んだ。
・英語を使って表現することに躊躇せず積極的に自分の考えを英語で表現しようとする姿に感心した。
・振り返りの時間を確保することや、発表した生徒の意見を教員が全体で評価していくことが課題である。
・グループやペアで話すことは、英語で話すことへの抵抗感がなくなり、学習効果も高いと感じた。
・英語を学ぶこと、英語で学ぶこと、さらにメタレベルで英語学習全体を通して学ぶことの３段階があるが、批判的思考力の習得は最後の段階となる。授業構成でここに力点をおくと前者２段階が疎かになる。
・繰り返しのなかで習得させながら、その繰り返しにもステップを踏んでいるのが良い。
・英語で聞き取ったり話したりすることに生徒が前向きだった。自分の教科でも活動場面を増やしたい。
・型を身につけ、さらにそれを活用し応用していくことを継続的段階的に行うことが大事だと感じた。
・発表者の声が小さくても、それを聞き取ろうとして生徒が静かに集中して聞く姿が印象的であったが、それは、発問がみんなの問いになっており、みんながみんなで考えようとしている証だったと思う。
・ディベートでの生徒の意見がどれだけオリジナルなものかその到達度についても吟味する必要がある。
・評価が難しいと感じた。ルーブリック的なものがきちんと整備されているかが大事である。
・今回のトピックは本当にディベート向きかどうか、また内容が盛りだくさんと感じるところがあった。

〇校内研修のグループ討議より

グループ討議では、英語の研究授業で提示された、批判的思考力を養う上で大切にしたい３要素について、自分の教科や授業で養うとすればどうすればよいか、なにができるか、また現状がどうかなどを考えて、他教科と意見交換してもらいました。以下の記述は、その討議で出た意見の抜粋です。

①　証拠に基づく論理的な思考力

（国語）小説の登場人物の心情について、勝手な解釈ではなく本文に書いてある証拠をもとに指摘させる。
（理科）物質の性質を調べる時、実験結果の仮説を推論させる。
（美術）リ・デザイン･･･椅子をユニバーサルなデザインにするために多面的な思考をさせる。
（数学）図やグラフなど視覚化して考える。また、解答の途中の説明をしっかりと書かせる。
（地歴）歴史的事象を題材にして因果関係を提示しながら歴史的な推論をすすめる。
（体育）それぞれのプレーでなぜそのプレーを選択したかを説明させる。
（その他）「なぜ」の問いを論理的に説明させないといけないが、教員がわかりすく説明してしまう。
（その他）誰かの言葉を自分なりにそしゃくさせる。その過程で「なぜ」を詰めていくことができる。

②　内省的思考

（美術）自分の作品をＡＢＣＤで評価させている。
（英語）ライティングで書かせたものをペアで発表させて、他者に評価させている。
（地歴）実際の社会ではどうなっているかを体感させる。
（理科）日常で起こる事象と学習内容との関連を検証する。
（国語）予習→授業→復習のサイクルでの気づきが大事である。
（その他）多角的な視点を持つために、読書や講演などを通して様々な立場の人の考えなどに触れる。

③　解決や判断を支える汎用的なスキル（問い、情報収集など）

（数学）帰納的解法と演繹的解法を使い分けられるような指導をする。
（国語）様々な文章や他者の作文を読んで疑問点を挙げさせる。単語でなく、文章（抜き出しではなく、自分の言葉）で説明させる。
（英語）読解力をつける。そして、Ｑ＆Ａを繰り返す。
（理科）実験を通して得られた結果から、それをどのように現実に活かしていくか考える。
（地歴）いくつかの事例を示し、その結果を推論させる。また、資料をもとに質問させる。他者の前で質問できることはある程度の知識や考えが必要である。